書き抜き読書ノート 2321	2019 年 10 月 4 日

木村靖二著『詳説世界史 改訂版』山川出版社 2019 年 3 月 5 日刊を読む

山川・詳説世界史―まとめ―

１．（１）第Ⅳ部では、近代後期の帝国主義時代に始まる地球世界の形成期から、第一次世界大戦を画期（かっき）として、地球世界が成立する現代の時代を学んできた。

（２）現代は、植民地支配をめぐる戦争、第一次・第二次世界大戦、冷戦（れいせん）下のアジア・アフリカ・中南米地域での武力抗争を経て、現在も内戦や国際テロ活動がたえない世界的な戦争や武力抗争の時代でもある。

（３）しかし、一方では、近代産業社会の拡大によって、工業・農業生産力が飛躍的に高まり、医学や情報伝達手段、宇宙開発などさまざまな分野で画期的な成果がうみだされ、そのもとでグローバル化が進行し、人々の生活や意識を一新させてきた時代でもある。

（４）第Ⅳ部の内容のポイントを振り返ってみよう。

２．国民国家の時代とナショナリズム

（１）国民国家の原理はフランス革命によりうみだされた。

（２）しかし、19 世紀には欧米諸国でも実際に国民国家タイプの国は多くはなく、多民族構成をもつ帝国がなお優勢であった。

（３）第一次世界大戦後になると、民族自決権に基づく国民国家として新規の独立国が成立し、第二次世界大戦後はその数はさらに増加して、国際連合加盟国数でみても現在 193 カ国（2011 年）までになっている。

（４）しかし、今も民族的自覚を強めて国民の国家への統合を強め、政治的・経済的な安定をはかるために、排他（はいた）的なナショナリズムを掲げたり、国内の少数民族を迫害（はくがい）して内戦を引きおこす国家が少なくない。

（５）国民国家の数が増す傾向がある一方、紛争や摩擦（まさつ）を調停して国際社会の安定をめざす国際連合の行動、また、諸国家を地域ごとにまとめて協力体制を築こうとする方向もある。

（６）これら二つの流れは現代の国際社会を動かす主要な要因をなしている。

３．アメリカ合衆国と大量生産・大量消費社会

（１）現代の歴史を考えるためには、第一次世界大戦で連合国側の勝利に貢献し、第二次世界大戦後の世界で主導的役割をはたした、アメリカ合衆国の動向の理解が不可欠である。

（２）合衆国はまた、近代産業での革新的生産方式や工業技術、現代都市建設などを先導し、世界の金融センターの役割を担い、また大量生産・大量消費の現代大衆社会のモデルを示し、現代大衆文化や学術研究においても重要な位置を占めてきた。

（３）こうした実力を背景に、アメリカは軍事的にも突出した大国となった。ソ連はアメリカへの批判的対抗者であったが、アメリカの国力に追いつくことができないまま崩壊した。

（4）しかし、唯一の超大国となったアメリカも、その力だけで地球世界の統一基準(グローバル化)を設定できるわけではない。

（5）ヨーロッパ諸国や日本といった競合地域に加えて、中国やインドなどの経済大国化によって、新たな挑戦を受けている。

4．地球世界の課題

（1）20 世紀後半には、生産力や軍事力によっては解決できない地球全体、人類全体に関わる深刻な問題が出現してきた。

（2）地球温暖化、産業化、開発がもたらす環境汚染や森林の減少などの環境問題、エネルギー資源・鉱物資源の枯渇(こかつ)と新エネルギーの開発、人口の増減の地域的不均衡(ふきんこう)や生活水準・人権などの地域的格差の拡大などは、現代社会が直接的、あるいは間接的につくり出した問題であり、人類が協同し、連帯しなければ対応することができない性格をもっている。

5．（1）① 19 世紀末から現在まで、世界でおきた戦争や、多数の犠牲者(ぎせいしゃ)が出た内戦や武力紛争を時代順に年表にまとめ、戦争や内戦・武力紛争がなかった年数を調べてみよう。

②また、戦争を、国家間の戦争とそれぞれの国内でおきた内戦とにわけ、それぞれの数がどう変化するか、またその原因はなにかを考えてみよう。

（2）①グローバル化の結果、英語は英語圏の公用語だけではなく、国際共通語となってきている。

②私たちの日常生活で使われる日用品や電気機器なども、英語表記のものが多い。身のまわりの道具や器具の名称に日本語ではなく英語表記が広まり出したのはいつ頃からか、またなぜそうなってきたかを考えてみよう。

P415 ～ 416

＜コメント＞

完全英訳版が出版された大学受験生の必読書、高校教科書「山川 詳説世界史」の最新版。本当によくできていて、改めて感心する。是非、英語版とともに、御一読を。

2019 年 10 月 4 日（金）